# 律儀な桜

角田 光代

（筆者は、昨年タクシーの運転手さんから聞いた、毎年桜は律儀に咲く、という言葉をことあるごとに思い出しています。）

七年前、二〇一一年四月、私は新聞社の依頼を受けて、東北の太平洋沿岸の町々を歩いた。町がなくなっているのに咲いている桜があった。そのことに私は心底驚いた。青空に映える満開の桜がうつくしいことに衝撃を受けた。①自然とはなんと残酷なのだろうと思った。こんなにもかなしい現実のなかで、季節が来れば桜はうつくしさを誇るかのように花開くのだ。たたえる人も、見る人すらもいなくても。

運転手さんが何気なく言った一言は、私にこの光景を思い出させた。本当にそうだ。何があっても桜は咲くし、そのことはあたりまえのことではなくて、とても不思議なことなのだ。

七年前に抱いた、残酷だという感想は、私のなかで少しずつ変わっているらしいと、②それもまた運転手さんの言葉で気づかされた。例年より寒かろうが暑かろうが、降雨量が多かろうが少なかろうが、温度が緩むとつぼみが膨らみ、あるときいっせいに花が開く。変わり続けるしかない私たちの暮らしに、そんなふうに変わらないものがあるということは、時に私たちを救うのではないか。③そんなふうに思うようになった。

## 確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

**(1)**　――線①「自然とはなんと残酷なのだろうと思った」とあるが、どんな点が残酷だと述べているのか。適当なものを選びなさい。

**ア**　周囲の町が大きな被害を受けている状況で、やはり桜も大きな被害を受けてしまっている点。

**イ**　かなしい現実のなかにあっても、桜はそのことに関わりなくいつものようにうつくしく咲く点。

**ウ**　桜がどんなにうつくしく咲いても、そのことをたたえる人も、花を見る人もいないという点。

〔　　〕

**(2)**　――線②「それ」が指す内容となるように、解答欄に入る言葉を三十五字以上四十字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□～□□□こと

**(3)**　――線③「そんなふうに思うようになった」とあるが、どのように思うようになったのか。適当なものを選びなさい。

**ア**　何があっても桜が咲くとは限らないのであって、私たちの暮らしが変わり続けるように、桜も変わり続けているのだと思うようになった。

**イ**　変わり続けるしかない私たちの生活に、桜のように変わることのないものがあるということが、時には救いとなることもあると思うようになった。

**ウ**　桜が咲くのは温度が緩むことがきっかけであり、私たちの暮らしがどのようなものかに関わらずに桜が咲くのを嘆いても仕方がないと思うようになった。

〔　　〕